

## 「限りない愚かさ」

2021/12/16



## ■浄土門・浄土宗は愚痴・愚者になりて往生、智慧をきわめて迷いを離れる仏道でない。

故法然聖人は、「浄土宗の人は愚者になりて往生す」と候ひしことを、たしかにうけたまはり候ひし……  
(親鸞の御消息、註釈版・771頁)

## ■存在的な罪惡表現

一つには、決定して深く、自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかたつねに没し、つねに流転して、出離の縁あることなしと信ず。 (善導「散善義」の深信釈、註釈版・218頁)

自身はこれ煩悩を具足する凡夫、善根薄少にして三界に流転して火宅を出でずと信知し  
(善導『往生礼讃』註釈版七祖篇・654頁)

一切の群生海、無始よりこのかた乃至今日今時に至るまで、穢惡汚染にして清淨の心なし、虚仮諂偽にして眞實の心なし。ここをもつて如来、一切苦悩の衆生海を悲憫して、不可思議兆載永劫において、菩薩の行を行じたまひし時、三業の所修、一念一刹那も清淨ならざることなし、真心ならざることなし。如来、清淨の真心をもつて、円融無礙不可思議不可称不可説の至徳を成就したまへり。如来の至心をもつて、諸有の一切煩悩惡業邪智の群生海に回施したまへり。すなはちこれ利他の真心を彰す。  
(「信巻」、註釈版・231-232頁)

## ■凡夫とは

凡夫とは愚かな人、凡庸な人を意味し、聖者に対しては仏教の道理を理解していない者とされる。原語の prthag-jana (プルタッグ・ジャナ)を玄奘(602-664)は「異生」(異なって生まれる、ひとり別に生まれたもの)と漢訳し、いまだ四諦の道理を理解していない凡庸浅識の者とした。

これが、後に「一般の人」・「愚かな人」を意味する語となり、さらに複数形に用いられて「下層階級の人びと」・「愚かな一般のひとびと」という意味をもつ語となる。一般の人間を現す凡夫という語が、人間の存在性の内面的な自覚内容として意味を捉えるようになったのは、中国から日本にいたる大乘仏教、なかでも浄土教思想のなかにおいてである。

## ■親鸞聖人の「凡夫」理解

「凡夫」といふは、無明煩悩われらが身にみちみちて、欲もおほく、いかり、はらだち、そねみ、ねたむところおほくひまなくして、臨終の一念にいたるまで、とどまらず、きえず、たえずと、水火二河のたとへにあらはれたり。  
(一念多念文意、註釈版・693頁)

## ■凡夫の有漏心からなる因果は顛倒・虚偽(行為的罪惡)

一つには有漏の心より生じて法性に順ぜず。いはゆる凡夫、人天の諸善、人天の果報、もしは因、もしは果、みなこれ顛倒す、みなこれ虚偽なり。

(『教行信証』「行巻」の『論註』引文、註釈版・158頁)

## ■凡夫の所行では「智行いまだ満たず」、涅槃に至る事がない。

凡夫所行の道と名づく。転じて休息と名づく。凡夫道は究竟して涅槃に至ることあたはず、つねに生死に往来す。これを凡夫道と名づく。

(『教行信証』「行巻」の『十住毘婆沙論』引文、註釈版・147頁)

## ■いづれの行にても生死を離れられない私のための本願

いづれの行にても生死をはなるることあるべからざるを、あはれみたまひて願をおこしたまふ本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人、もつとも往生の正因なり。

(『歎異抄』第三条、註釈版・834頁)

■ 誓願・名号不思議による拯すくい

誓願の不思議によりて、やすくたもち、となへやすき名号を案じいだしたまひて、この名字をとなへんものをむかへとらんと御約束あることなれば、まづ弥陀の大悲大願の不思議にたすけられまゐらせて、生死を出づべしと信じて、念仏の申さるも如来の御はからひなりとおもへば、すこしもみづからはからひまじはらざるがゆゑに、本願に相應して、実報土に往生するなり。

(『歎異抄』第十一章、註釈版・838頁)

■ 清浄願心の回向成就の教・行・信・証

それ真宗の教行信証を案ずれば、如来の大悲回向の利益なり。ゆゑに、もしは因、もしは果、一事として阿弥陀如来の清浄願心の回向成就したまへるところにあらざることあることなし。因浄なるがゆゑに、果また浄なり、知るべしとなり。

(『教行信証』「証巻」、註釈版・312頁-313頁)

■ 光明に照らされ明らかに見える影

月かげのいたらぬさとはなけれども ながむる人のところにぞすむ

と詠われた。さわやかな秋の月は、その光をすべての人に分けへだてなく注いでいるが、光を背にしている者は、光の中にありながら光に遇うことができないばかりか、わが身の黒い影におびえるばかりである。しかし影を背にして月を仰ぐ人は、影を持ったままで月の光を全身にあびて、心の底まで、澄みわたっていく。大悲智慧の光明は、万人を平等に照らしているが、その教えを疑いなく聞き受けて、われもまた光の内にと念仏する者のみが、光に包まれた人生を送ることができるというのである。

梯實圓『精読・仏教の言葉 親鸞』(1999年、大法輪閣、49頁)

※阿弥陀仏の限りない慈悲の光にいだかれて、人は自らの愚かさを知る

■ 現実の社会生活を起点として……

『歎異抄』で顕著に見られる現実の具体的行為を取り上げそれを起点として論が展開していることは、親鸞自身の直接的な教学表現にあまりみられないことであり、親鸞の言葉としては特徴的なことである。(中略)現実の社会生活における善悪の行為を問題の起点として、現実の行為に惑わされることなく阿弥陀仏の世界に帰入させようとすることにあった。

(矢田了章『『歎異抄』の教学史的立場』矢田了章編『歎異抄に問う—その思想と展開—』所収、18・19頁)

■ 現実の社会生活では

・ 落語「花筏」

提灯屋の徳さん  
大関の花筏、  
土地の網元のせがれの素人力士の千鳥ヶ浜

・ 月曜深夜のラジオから

「限りない愚かさ 限りない慕情」

↓↓

「限りない愚かさ 限りない(大)慈悲」